

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20330114

研究課題名（和文） グローバルな富の再分配と主観的幸福の増大

研究課題名（英文） Global Redistribution of Wealth and Increase of Subjective Well-being

研究代表者

高坂 健次（KOSAKA KENJI）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：60027977

研究成果の概要（和文）：

本研究課題の目的は、富のグローバル・レベルでの再分配と人々の主観的幸福の変動との関連をモデル化して再分配の効果を分析することにある。世界価値観調査データを用いたシミュレーション分析の結果、先進諸国から低開発国への富の再分配は、世界の幸福割合を増加させ不幸割合を減少させること、幸福を増加させる効果に比べて不幸割合を減少させる効果の方がより大きいことが分かった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this project is to analyze the effect of redistribution of wealth at global level on people's subjective well-being (SWB) and subjective ill-being (SIB) by constructing a simulation model. The results of simulation analysis based on the World Values Survey dataset reveals that transfer of wealth from developed countries to underdeveloped countries enhances SWB and diminishes SIB in the world, and effect on diminution of SIB is much greater than enhancement of SWB.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2009 年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2010 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
年度			
年度			
総計	13,700,000	4,110,000	17,810,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：数理社会学、主観的幸福、グローバルバージョン

1. 研究開始当初の背景

グローバル化に伴う地球規模の不平等と格差拡大に対しては、国際援助や支援によって富の再分配による是正が計られているが、十分な効果を上げているとは言い難い。それは一つには、何のための再分配かについての定式化と再分配の効果測定が曖昧なままにされてきたことによる。

特に、人びとの多様な幸福観に根ざした主

観的幸福感が再分配によってどのように変化するかという効果分析は、グローバル化時代の人類の幸福の追求に欠くべからざる研究課題である。このために、主に心理学や社会学で研究されてきた経験的な主観的幸福研究と、最適分配論や分配的正義論で展開されてきた規範理論的研究を架橋する独創的な研究枠組みが求められる。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、富（具体的にはGDP）のグローバル・レベルでの再分配と人々の主観的幸福の変動との関連をモデル化して再分配の効果を分析することにある。この研究によって、グローバル化の展開により世界的不平等が拡大していくとき、幸福感の分布はどのように変動するのか、また逆に、開発や援助による富の再分配によって、幸福感はどの程度改善されるのか、といった問いに予測を与えることができる。

このために、再分配と再分配後の不平等化メカニズムとともに、関連するパラメータ、そして目的変数の初期値を確定する必要がある。また、シミュレーションの前提となるデータの妥当性を吟味する必要もある。これらの点を踏まえて、具体的には以下の諸点に取り組んだ。

- (1) 価値意識についての既存の国際比較調査データの妥当性の解明
- (2) 一国内における不平等生成・変動メカニズムの解明
- (3) 幸福観の解明と幸福感の測定
- (4) 人々の主観的幸福を適切な仕方で増大させるような、グローバル・レベルでの富の再分配の方法を見出すための再分配シミュレーション・モデルの構築

3. 研究の方法

この研究目的の遂行のために、以下のサブ・プロジェクトを有機的に連携させながら進めていく。すなわち、経験的研究プロジェクトとしては(1)既存の国際比較調査のデータの問題点の検討と再分析（計量班）、(2)フィールド調査に基づく多様な幸福観の析出と不平等を生み出す社会的・文化的装置の発見（フィールド班）、理論的研究プロジェクトとしては、(3)不平等生成・変動メカニズムの理論的解明（数理モデル班）、である。そして、これらの研究を踏まえて、(4)グローバルな富の再分配と主観的幸福の増大についてのシミュレーション・モデルの構築と分析（シミュレーション班）、を行う。

具体的な研究については各研究班が主体的に遂行するが、全体研究会において各研究班の成果を共有する。

- (1) 計量班では、既存の価値意識についての国際比較調査研究のレビューを行う。さらに、フィールド調査班と連携しながら、ネパールを対象とした事例研究を実施する。これらの結果を受けて、価値意識についての既存の国際比較調査を用いて、各国の主観的幸福分布を測定する作業に取り組む。
- (2) フィールド調査班では、各フィールドに固有の幸福観についてのデータ収集、さ

らに不平等を生み出す社会的・文化的装置の観察を行う。ネパールでは計量班と連携しつつ資料収集ならびにデータ収集を進める。

- (3) 数理モデル班では、既存の不平等モデルのレビューならびにモデルの再検討を行う。こうした研究の結果を受け、シミュレーション・モデルに組み込む具体的な不平等生成・変動メカニズムをモデル化する。
- (4) シミュレーション班は、モデル化に向けて3つの班から得られる知見の整理と統合に特化し、全体研究会を主導する。

4. 研究成果

(1) 最新の日本国内のデータとして2005年SSM調査データを用いて、仮想的な所得再分配によって、人々の主観的幸福そして主観的幸福の社会的総和がどのように変化するかを、シミュレーション分析した（石田2009）。ここでは平等主義の観点に立って、段階的に完全平等へと分配を変化させるという再分配方法を採用し、平等化の度合いによる幸福総和（平均）の挙動を分析した。このために、各個人・世帯のプロフィールに応じて、所得を独立変数とする主観的幸福（生活満足得点）関数を調査データから推定し、次にこれをもとに所得再分配後の主観的幸福の変化を予測した。

結果として以下の知見が得られた。個人所得モデルでは、ジニ係数を68%下げたところで、平等化による平均幸福改善効果に飽和点が見られた（図1）。このことは、段階的平等化による所得再分配はある程度までは社会的な幸福総和を改善させるものの、過度な平等化の段階に入ると逆に幸福総和を減少させることを示している。この結果は、効率的に幸福を高めることを目的とする場合は、適度な平等分配が効果的であることを示唆している。ただし、改善の効果自体は決して大きなものではなかった。

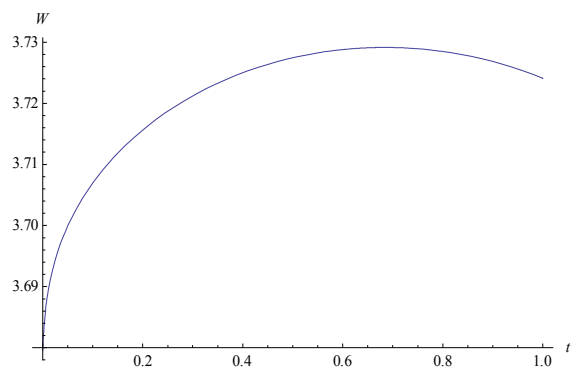


図1: 再分配率 t による平均幸福の変化 (男性個人所得)

世帯所得モデルでは、平等化による平均幸

福改善の効果はほぼ単調に増大し、改善の効果そのものも個人所得モデルよりも良好であった(図2)。この結果は、世帯所得の再分配については、平均幸福改善のためには平等化の度合いを高めていくことが効果的であることを示している。ただし、いずれの場合においても、全体的に所得再分配による社会的幸福への効果は限定的であると言わざるを得ない。このことは結果的に、所得の再分配のみでは社会的幸福の促進は不十分であり、社会的幸福の促進のためには、人々の幸福に関連する他の施策と再分配政策とを効果的に連携していく必要があることを示唆していると言えるだろう。

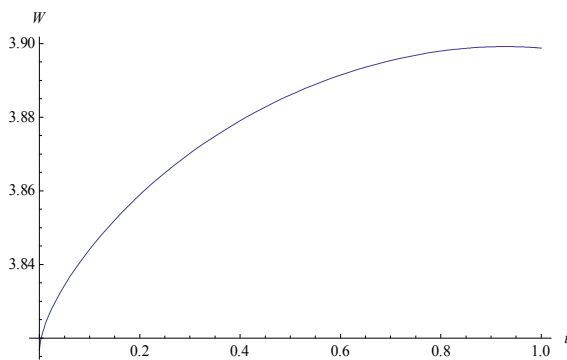


図2：再分配率 t による平均幸福の変化（世帯所得）

(2) 世界価値観調査 (World Values Survey) 1999-2004年データを用いて、世界的な富(名目GDP)の再分配によって人びとの幸福感がどのように変化するかをシミュレーションした(Ishida et al. 2010)。65カ国のデータを用いて、高所得OECD諸国から低開発国への富の移転(援助)、あるいは逆に低開発国から高所得OECD諸国への富の移転(搾取)によって、予想される幸福/不幸がどのように変化するかをロジットモデルで予測し、再分配の効果をシミュレートした。

結果を単純に示すために、まずOECDの1%の富をOECDから低開発国に移転する場合の効果を示す。このとき、世界の幸福割合は44.569%から44.585%に上昇し、0.016%の純増となる。一方、不幸割合は11.083%から11.061%減少し、0.022%の純減となる。

逆にOECDの1%の富を低開発国からOECDに移転する場合、世界の幸福割合は44.569%から44.554%に減少し、0.015%の純減である。一方、不幸割合は11.083%から11.104%に上昇し、0.021%の純増となった。

次に、移転される富の総量を変化させた場合の効果を検討する。まず、低開発国からOECDへの「搾取」の効果であるが、移転される富の総量が多くなるにつれて、幸福割合は減少し、不幸割合は増加する。不幸割合の純増と幸福割合の純減を比較すると不幸の純

増の効果が一貫して大きくなった(図3)。

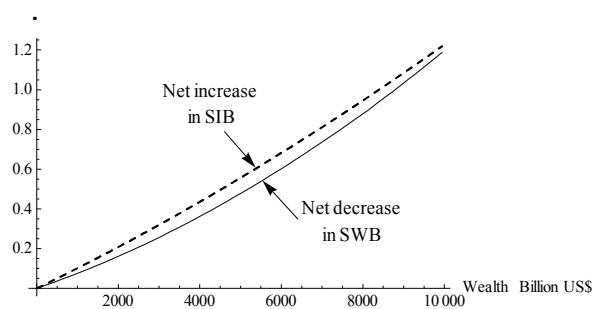


図3：搾取による不幸割合の純増と幸福割合の純減

最後に、OECDから低開発国への「援助」の効果を検討した。移転される富の総量が多くなるにつれて、幸福割合は増加し、不幸割合は減少した。幸福割合の純増と不幸割合の純減を比較したところ、幸福割合の増加には飽和点がみられた。つまり、幸福割合の増加のみを考慮する場合、適度な移転量にとどめる必要がある。一方、不幸割合の純減は幸福割合の純増よりも一貫して大きく、また単調増加する(図4)。つまり、「幸福の加算」よりも「不幸の減算」により重きを置く場合、富の移転はより大きな意味を持つことが分かった。

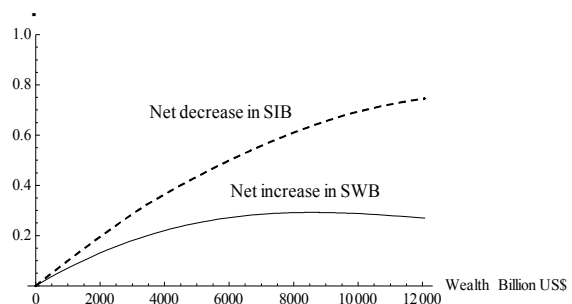


図4：援助による幸福割合の純増と不幸割合の純減

(3) 経済状態としての不平等分配と社会意識としての主観的幸福を結びつける社会心理的メカニズムの一つとして、相対的剥奪(不満)のメカニズムがあり、社会学や心理学、政治学では古典的な理論として研究されてきた。再分配シミュレーション・モデルの精緻化のために、この相対的剥奪メカニズムの理論的研究を行った。

具体的には、学説史研究として以下のような研究を行った(高坂2009, 2010a, 2010b, 2011a, 2011b)。

① 相対的剥奪論の嚆矢であるスタウファ一達の『アメリカ軍兵士』の原典に遡って、それが意図していたこと、ならびにその限界について精確に読み解い

- た。
- ② 相対的剥奪論のその後の展開において、『アメリカ軍兵士』の意義と限界が引き継がれていったかについて、主としてマートン=キット、ケンドール=ラザーズフェルド、デーヴィスらの仕事について精査した。
 - ③ 「相対的剥奪」と重要な関連性をもつ「準抛集団」の概念についてあらためて着目し、「準抛集団」の識別を事後的・経験的に行う方法を案出し、かつ『アメリカ軍兵士』の原典に盛られたデータに即した分析を行うことでその方法を例示した。

また、相対的剥奪を経済不平等指数であるジニ係数と結びつけるイザキの研究をもとに、ある種の経済発展の状況では、人びとの所得が上がりジニ係数が下がることで状態が「改善」するにもかかわらず、人びとの剥奪間はむしろ高まる場合があるというパラドックスを理論的に見だし、その社会学的意義を考察した（高坂ほか 2011）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

- ① 高坂健次、2011、「相対的剥奪論 再訪（五）」『関西学院大学社会学部紀要』112、pp. 113-119、査読無。
 - ② 高坂健次、2011、「相対的剥奪論 再訪（四）」『関西学院大学社会学部紀要』111、pp. 171-178、査読無。
 - ③ 石田淳、2010、“Trend Analysis of Anticipated Lifetime Income Inequality among Post-war Japanese Youth,” *International Journal of Japanese Sociology*, 19, pp. 64-81, 査読有。
 - ④ 高坂健次、2010、「相対的剥奪論 再訪（三）」『関西学院大学社会学部紀要』110、pp. 47-54、査読無。
 - ⑤ 浜田宏・七條達弘、2010、「異質な集団における相対的剥奪モデル」『理論と方法』25(1)、pp. 107-123、査読有。
 - ⑥ 高坂健次、2010、「相対的剥奪論 再訪（二）」『関西学院大学社会学部紀要』109、pp. 137-147、査読無。
 - ⑦ 石田淳・浜田宏・高坂健次、2010, “Simulation Analysis of the Effects of the Global Redistribution of Wealth on Subjective Well-being in the World,” *Kwansei Gakuin University Social Science Review*, 14(2009), pp. 1-20、査読無。
 - ⑧ 高坂健次、2009、「相対的剥奪論 再訪（一）——『アメリカ軍兵士』」『関西学院大学社会学部紀要』108、pp. 121-132、査読無。
 - ⑨ 浜田宏、2009、「相対リスク回避モデルの再検討——Breen and Goldthorpe モデルの一般化」『理論と方法』24(1)、pp. 57-75、査読有。
 - ⑩ 石田淳、2009、「仮想的所得再分配による不平等と幸福総和の変動——2005 年 SSM 調査データを用いたシミュレーション分析」『社会学評論』59(4)、pp. 752-767、査読有。
 - ⑪ 浜田宏、2008、「進学率と世代間移動の数理モデル」『社会学評論』58(4)、pp. 608-624、査読有。
- 〔学会発表〕（計 9 件）
- ① 高坂健次、他、「相対的剥奪のパラドックス」第 51 回数理社会学学会大会、2011 年 3 月 7 日、沖縄国際大学。
 - ② 石田淳、「『機会不平等に起因する相対的剥奪』によるジニ係数の分解」第 51 回数理社会学学会大会、2011 年 3 月 7 日、沖縄国際大学。
 - ③ 高坂健次、他、“A Notion of Relative Deprivation Revisited: Towards Further Formalization of Its Concept,” The 17th World Congress of the International Sociological Association, 2010 年 7 月 17 日、University of Gothenburg, Sweden.
 - ④ 浜田宏、“A Model of Class Differentials in Educational Attainment,” The 17th World Congress of the International Sociological Association, 2010 年 7 月 14 日、Gothenburg, Sweden.
 - ⑤ 石田淳、他、「相対的剥奪理論のもう一つの展開」第 49 回数理社会学学会大会、2010 年 3 月 7 日、立命館大学。
 - ⑥ 浜田宏、「相対的剥奪モデルの理論と実証」第 48 回数理社会学学会、2009 年 9 月 20 日、北星学園大学。
 - ⑦ 浜田宏、“A Rational Choice Model of Educational Attainment,” The 9th Conference of The Asia Pacific Sociological Association, 2009 年 6 月 13 日、Bali, Indonesia.
 - ⑧ 石田淳、“Inequality of Anticipated Lifetime Income of Young Generation in Japan,” The 9th Conference of the Asia-Pacific Sociological Association, 2009 年 6 月 13 日、Bali, Indonesia.

- ⑨ 石田淳、他、"A Simulation Analysis of Effects of Global Redistribution of Wealth on Subjective Well-being in the World," The 38th World Congress of the International Institute of Sociology, 2008年6月27日、Central European University, Hungary.

[図書] (計1件)

- ① 高坂健次 (編著)、2009、『幸福の社会理論』放送大学教育振興会、pp. 189。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高坂 健次 (KOSAKA KENJI)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：60027977

(2) 研究分担者

古川 彰 (FURUKAWA AKIRA)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90199422

渡邊 勉 (WATANABE TSUTOMU)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：30261564

浜田 宏 (HAMADA HIROSHI)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：40388723

中野 康人 (NAKANO YASUTO)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：50319927

石田 淳 (ISHIDA ATSUSHI)
関西学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：40411772

(3) 連携研究者

松田 素二 (MATSUDA MOTOJI)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50173852

斎藤 友里子 (SAITO YURIKO)
法政大学・社会学部・教授
研究者番号：80278879